

須川への旧道と須川地区内散策

須川地区（上田市自治会連合会ホームページより）

須川自治会は上田市のほぼ中心に位置するも、山間地であることから市街地への移住が進み、住居戸数の減少と高齢化率の上昇による自治会存続が懸念されている状況です。そんな中ではありますが、自治会存続のため重複する役を受け入れし頑張っています。当自治会には須川池があり昭和28年「全日本ケート選手権」の開催映画「およう」のラストシーンのロケ地など意外と面白い土地でもあります。この池が今後市民の憩いの場所になればいいと期待しているところです。

4 須川から諏訪形へ通じる旧道（『諏訪形誌』 188ページ）

須川から諏訪形へ通じる道は、主要道路以外に二本の山道がありました。この山道で人々は、大正時代に県道ができるまでは、旧道で小牧山を越えて須川と諏訪形との間を徒歩で行き来していました。

須川から諏訪形方面に向かう道は、須川の庚申塔の横を通る一本道でしたが、途中から二本に分かれます。一本は炭鉱山の東側を通って、現在の林石材店付近に下りて来る道で、この道が主に使われていたようです。もう一本は、現在の上田市霊園付近に下りて来る道です。どちらも重要な生活道路となっていました。また、昭和30年代ころまでは、子どもたちがこの道を通って須川池にスケートをしに通っていました。

これらの旧道は、一時は荒れ放題になっていましたが、現在は地域の人たちによってたいへんよく整備されています。道幅40～50cmくらいですが、電力会社が鉄塔を管理するための道が整備されています。

【注】『諏訪形誌』では、原稿の段階では「現在、これらの旧道は樹木が生い茂り、荒れ放題になっていて」とありましたが、現在はたいへんよく整備されています。上田市のマウンテンバイク協会で整備を進めているようです（未確認）。また、諏訪形在住の西山隆さんなども整備に関わっておられるようです（未確認）。

諏訪形誌の記述にあるように、林石材店の東側、「炭鉱山」の付近からと上田市霊園からそれぞれ須川に通じる道があって、途中で合流します。また、悠生寮の少し北側から蚕影社に通じる道があり、この道が蚕影社付近で炭鉱山からの道と合流します。どの道もよく整備されていて歩きやすい散策路（ただし山道）です。今回の企画では「悠生寮北側～蚕影社～須川」のコースを予定しています。

3 亜炭の採掘（『諏訪形誌』 141ページ）

第1章でもふれているとおり、亜炭は小牧山一帯の「小川層」と呼ばれる、今から1100万年～520万年ほど前に堆積した地層の下部、「青木層」との境目に当たる部分に多く含まれています。

「亜炭」とは、石炭のうち炭化度が低く、水分や酸素を多く含んだ、あまり質の良くないものを指します。炭素の含有量が少ないため発熱量は低く、1kg当たり4000キロカロリー（16.8MJ（メガジュール））ほどで、一般炭の55～75%程度です。

亜炭の採掘は江戸時代の終わりころ、松代藩士の佐久間象山らによって始められたと伝えられていますが、確かなことはわかりません。昭和17年（1942）5月、小牧で日中炭鉱株式会社が操業を開始し、諏訪形でも日中炭鉱株式会社傘下の美吉野炭鉱株式会社が採掘を開始して、亜炭の採掘が盛んになりました。

亜炭の採掘場所は、現在のの上田市霊園南側の小牧山で、旧蚕影社があった場所から少し下った地点です。この当時、採掘作業に従事した柳澤覚や窪田勝義らの話では、「坑口は幅約2.5m、高さ約2m、坑道の長さは120mくらいではないか」とのことでした。また、亜炭層の幅は20～30cm、傾きは平均15度くらいでした。

亜炭の採掘は、坑道の両側にある亜炭層に横穴を掘るという方法で行われていました。横穴を1mほど掘ったところで安全確保のために杭を立て、横板を渡した下にもぐりこんで小さなつるはしで採掘を進めていくという原始的な方法でした。そのため、常に落盤の危険がありました。話を聞かせてくれた柳澤覚も落盤事故に遭遇し、九死に一生を得た経験の持ち主のひとりでした。しかし、亜炭はもともと水分が多いので、坑内でのガス爆発の危険はありませんでした。

採掘された亜炭は、団塊状や板状なもので、トロッコで坑外へ運び出され、適当な大きさに砕かれて、燃料や練炭の原料として出荷されました。

採掘作業を終えた作業員が、帰宅前に身体の汚れを洗い落とすための「簡易浴場」が、現在の市道国分・川辺町線（小牧バイパス）の諏訪形信号機の東側に設けられていました。この風呂はトタン製の簡単なもので、建物は粗末なバラックづくりでした。また、一度に入浴できるのはふたりが限度という小さなものでした。風呂の水は近くの小川から汲み込んでいて、風呂焚きをする担当者も事前に決められていました。

このような炭鉱は御所や神畑などにもあって、最盛期には亜炭の産出量は月産3000トンにも及び、石炭不足の戦時下では大切な燃料資源となりました。しかし、戦後になると、石油などが多く出回るようになって、亜炭の鉱山は経営状況が悪化し、昭和26年(1951)、美吉野炭鉱はついに閉山に追い込まれました。これらの炭鉱の跡は、現在でもわずかではありますが、坑口などを確認することができます。

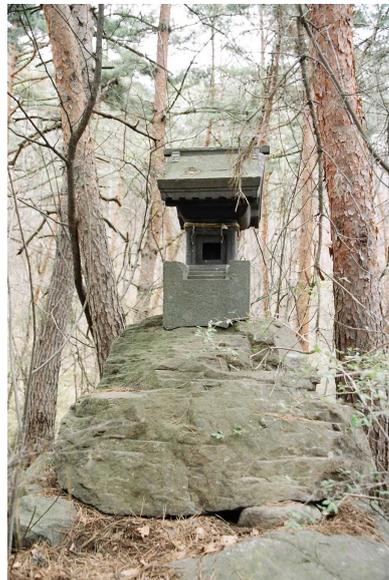
参考文献『上田市誌(上田の地質と土壌)』

7 蚕影社(蚕養国社) (『諏訪形誌』 276ページ)

養蚕が盛んだったころ、蚕がよく生育して良質の繭が取れるようお願いする「蚕影社」が各地に祀られていました。祭神は保食神(うけもちのかみ)と稚産霊神(わくむすびのかみ)という神です。特に保食神は、『古事記』にも登場している神で、「この神の眉毛から蚕が生まれた」とされています。

諏訪形では現在、諏訪神社本殿右側に「蚕影社」が鎮座していますが、明治14年(1881)発行の『長野県町村誌』には、「蚕養国社 東西二十間、南北十五間、面積一反歩、村の辰巳(南東)の方、東山内青京原にあり。祭神は稚産霊神、保食神で祭日は四月十七日」とあります。明治44年(1911)、この場所から現在の場所に移されました。

上田市霊園南側尾根の一部が、通称「蚕影山」と呼ばれていることから、かつてこのあたりに「蚕影様」が祀られていたものと考えられます。大正3年(1914)に書かれた青年会の記録には、「この場所が蚕影神社(蚕影社)の跡地で、周辺一帯を「蚕影公園」として整備し、山桜や栗の木を植林した」とあります。現在残っている石の祠も、そのときに建立されたものかもしれません。百年余りが経過した現在、二代目が三代目と思われる山桜や栗など数本が自生していて、往時の面影が偲ばれます。



2 庚申塔(『諏訪形誌』 279ページ)

「庚申」とは、中国から渡来した道教の三尸(さんし)説が日本的な「お日待ち信仰」として定着したものと考えられ、十干十二支の組み合わせによって60日に1回めぐってくる庚(かのえ)庚申(さる)申の夜だけに行った行事です。特に、江戸時代には盛んに行われました。庚申の夜には人が眠っている間に、人の体内にいる「三尸」という虫が体内を抜け出し、天帝(北斗七星)にその人の犯した罪を告げると伝えられています。三尸の虫が抜け出していくことを防ぐために、一晩中当番の講中の家で眠らずに飲食しながら世間話に興じ合い、一番鶏が鳴くまで起きていることが延命長寿につながるという、一種の呪術的な行為です。

庚申にあたる年や日に、庚申の講員が集落の境界や道路沿いに記念塔を建てました。これは、「庚申塔」と呼ばれ、主尊である「青(しょう)青面(めん)面金(こん)金剛(ごう)剛」や三頭の猿、二羽の鶏などを碑面に彫ったものと、「庚申」の文字だけが刻まれたものがあります。なお、庚申塔に刻まれている「青面金剛」とは、最初は悪神だったものが後に善神となったもので、青面、赤眼の憤怒相で二・四・六臂に武器などを持ち、身体に大蛇がまわり逆髪にドクロを乗せる形が一般的です。日本では道教と結びつき「三猿神」とともに庚申待の本尊とされることが多い神です。

諏訪形では、次の三か所に、「庚申塔」が建てられています。

- 諏訪形高町細川家墓地入口付近の「庚申塔」は高さ1.15mで、「四臂青面金剛立像」「二鶏」が彫られ、「元禄六年癸酉歳十一月二十有日」とあります。
- 須川西山旧道沿いの「庚申塔」は高さ1.2mで、「四臂青面金剛立像」「二鶏」「三猿」が彫られ、「元文五年庚申九月施主須川村中」とあります。
- 中村石田地籍の「庚申塔」は高さ1.2メートルで、「庚申」の文字だけが彫られていて、「寛政七年乙卯村中」とあります。



高町の庚申塔



須川の庚申塔



中村の庚申塔

横林家住宅

出桁造り（だしけたづくり）と呼ばれる構造を持つ建物です。「出桁造り」とは、梁または腕木を側柱筋より外に突出して、その先端に桁を出した構造で、江戸時代以来一般的だった町家（店舗兼住宅）では、軒を深く前面に張り出した「出桁造」による立派な軒が商店の格を示していました。関東の重厚な町家でよく見受けられます。このようことから、「横林家」が地域の有力者であったことが想像できます。



出桁造りとは、軒を深く出すために、垂木をささえる桁を胴差よりも外に出した納まりのこと。出し桁は、桁を化粧材とするために、すべて鉋仕上げとなり仕口も重なりが見える。そのために丁寧な仕事が要求されて、大工仕事が格段に厄介になる。出し桁は重厚な雰囲気になるので、商家などで用いられた。

「タクミホームズ 建築用語集」より

1 道祖神（『諏訪形誌』 258ページ）

道祖神は、「猿田彦大神」をはじめとする道案内の神とされ、「塞の神」とも呼ばれています。また、村落への邪霊の侵入を防ぎ、旅人の安全を守る神として、古来から庶民の信仰の対象となっていました。江戸時代以後は、その形状から良縁、安産、夫婦円満、子どもを守る神として、多岐にわたって信仰されてきています。またその多くは、祀られている場所が村境となっています。諏訪形では、概ね村の東西南北にあたる地籍に立てられています。諏訪形にある道祖神はいずれも、建立年は不明です。



東 通称カンカン石北側



西 北田中と辻田の境



南 堂村公民館北側



北 東浦と北浦の境



深町の道祖神



須川の道祖神

これらのほか、中村と須川地区にも、それぞれ一基ずつの道祖神があります。また、諏訪形の住居地域が広がったため、昭和58年（1983）には、深町地籍にも新たな道祖神が建てられました。平成29年（2017）、カンカン石北側道祖神前の道路を拡幅する工事が行われた際、現在の道祖神の下から塔身（高さ1.05m、幅45cm）が真ん中から二つに割れた道祖神が出土しました。そこには文政十丁亥（一八二七）二月八日高町と線刻されていました。この年はカンカン石建立の10年後にあたります。また、同所から小型の五輪塔と思われる「火輪」も出土しました。これらが何を意味しているのかは不明ですが、埋め戻されました。

三夜堂（『諏訪形誌』 258ページ）

「三夜堂」は一般に「二十三夜堂」とも呼ばれ、勢至菩薩を本尊としています。下弦の月の夜を「二十三夜」と呼びますが、「三夜堂」はこの二十三夜に女性が集まって念仏と唱え、茶会の席がもたれた場所です。「三夜」が「お産」に結びついて、安産祈願のお祭りとなっていたと言われています。



なお、須川の三夜堂に安置されていた「地藏菩薩座像」と「勢至菩薩立像」は、現在は須川公民館に安置されています。

参考文献：Cosmos Factory (web版)

4筆塚（『諏訪形誌』 281ページ）

「筆塚」は寺子屋の子弟たちが師匠を偲ぶために、また、使い古した筆などを供養するために建立された記念碑です。幕末から明治初期にかけて、諏訪形にも寺子屋があったことから、「筆塚」があっても良さそうなのですが、なぜか、この地域の「筆塚」は須川の観音堂の脇に建立されています。

この塚は高さ1.3m、幅1.07mの菱形の自然石に雄渾な筆致で「筆塚」と彫られています。碑面には「元治元年（一八六四）」の建立年も刻まれています。元治元年と言えば、尊皇攘夷か佐幕かといった激動の時代で、明治維新の4年前の年です。諏訪形の若者たちは、やがてやって来る新しい時代に備えて教養を身につけておかなければ、という熱い思いで勉学に励んでいたのかもしれませんが、なお、このような「筆塚」は小牧と御所にも建立されています。



【ちょっとコラム】

「諏訪形には筆塚は存在しないのか？」については、あちこちで再三触れてきています。web版の「諏訪形に筆塚はないのか」や「5月29日ウォーキングイベント資料」などをご参照ください。

ところで、筆塚に代わるものとして（？）諏訪形には「宮下惇徳翁頌徳碑（『諏訪形誌』282ページ）」があります。宮下惇徳は本名明義、通称は理兵衛で、明治時代に諏訪形など多くの地域でインフラ整備や産業振興、隣保事業、教育などの面で多大な功績を残した人です。御所村の「松恵堂（寺子屋）」三代目、田子温廉の一番弟子として知られ、明治元年から6年にかけて諏訪形村内に寺子屋を開いて、50人ほどの子どもたちを教えていたと記録されています。

惇徳の没後、門人たちがその徳をたたえて、「頌徳碑」を建立しました。この碑は現在、子孫にあたる宮下健宅の一角にあります。この碑は「筆塚」ではありませんが、建立の経緯などから考えると、筆塚に準ずるものとも言えるのではないのでしょうか。



諏訪形誌を歩く 余聞（北沢伴康諏訪形誌活用委員会顧問（元：諏訪形誌編纂委員会委員長）による）

「須川」は木曾義仲に關係する「落人伝説」がある集落です。また、「須川の庚申塔」から須川地区に向かう途中には「諏訪神社の跡」と言われている場所があります。「三夜堂」や「筆塚」のある場所から東側の斜面につけられた急な道を登ると、「女生徒の開墾跡地（花水地籍）」「番屋跡」「お伊勢様」などもあります。これらについて、北沢顧問が以下のように語っています。詳細については当日、北沢顧問のお話をお聞きいただきたいと思います。

落人伝説

「須川」は旭将軍木曾義仲の重臣、手塚太郎光盛（手塚治虫の祖先とも言われているようです）の末裔に当たる一族が隠れ住んだ里とも伝えられています。鎌倉勢は木曾義仲の死後、義仲に關係する人々を執拗に探索していたと言われ、手塚光盛の一族もそれから逃れるために各地に移り住んだとされています。塩田の手塚地区などと同様、須川にも手塚一族の人々が隠れ住んだと言われている地区です。現在も須川地区には手塚姓を名乗る家も何軒かあります。

諏訪神社の跡（『諏訪形誌』271ページ）



須川地区にはかつて、諏訪神社が祀られていました。1889（明治22）年の町村制施行に伴い、「同一地区内に諏訪神社は一社」という考えから、現在の諏訪神社に統合されたものと言われています。この「旧諏訪神社（須川の諏訪神社）」のあったあたりには、現在では「宮浦」という地名が残っています。

左の写真は現在の「諏訪神社」ですが、右から2番目、「天神宮」の建物が須川にあった「諏訪神社」を移築したもののようです。

女生徒の開墾跡地（『諏訪形誌』104ページ）

食糧事情が極端に悪かった1944（昭和19）年頃、上田市立高等女学校（現：長野県上田千曲高等学校）の女生徒たちが須川花水地籍の山林を農地にするために開墾を行いました。生徒たちは毎日、鍬をかついで約4kmの道を行き来しました。この時、一人一日あたりの開墾目標は2坪（約6.6㎡）とされていて、開墾された総面積は3600坪（12000㎡）にもものぼると記録されています。開墾された農地は現在では、須川地区の皆さんによって利用されているそうです。

7 原野の開墾や食料、生活資材の増産（『諏訪形誌』104ページ）

さらに、昭和20年（1945）3月には、「決戦教育措置要綱」、同年五月「戦時教育令」などで、学生等に対しても「食糧増産」や「軍需生産」を最優先としています。



長野県は「女子中等学校報国農場開墾計画」を発表し、女子生徒に1日2坪（約6.6㎡）、5日間10坪（約33㎡）を開墾させる計画を立てました。当時の上田市立高等女学校（現：長野県上田千曲高等学校）は当初、上小地方事務所から殿城村（現上田市殿城地区）の山林原野が割り当てられました。しかし、教師らが現状を視察調査したところ、この場所は女子による開墾は無理ということで他の場所を探したところ、須川の花水地籍にある市有林約7000坪（約23000㎡）と、隣接の民有地が格好な場所があることがわかり、この場所を開墾することになりました。当時、この場所は樹木が伐採された跡地で、切り株は所々にあるものの緩やかな南面傾斜で、開墾には最適な場所でした。昭和19年（1944）9月4日には、鋤入れ式が行われて「上田市立高等女学校報国農場・昭和19年9月4日」の標柱が建てられました。この標柱は、現在は残っていません。

「花水地籍」と巴御前（『諏訪形誌』45ページ 「巴こぼればなし」）

須川集落から丸子の尾野山側へ少しばかり行った左側の場所に、「花水」という地籍があります。この「花水」という名前の由来は、ある古老の話によると、木曾義仲が依田城で布陣の際、愛妾の巴が山野の花を愛でたり摘み採ったりするために、この地をたびたび訪れたことがあったのでこの地名がついたとのことでした。

また、上田市富士山馬場（ばっぱ）にある共同墓地の中ほどには、巴ともう一人の愛妾である山吹の供養塔といわれている室町時代の様式を備えた五輪塔が、並んで建てられています。



馬場に残る2基の五輪塔

番屋跡

江戸時代、須川は幕府直轄地の天領（尾野山）と上田藩の領地との境に位置していたため、「番屋」が置かれていました。番屋には番人が交代で見張りをしていたのですが、須川の有力農民がこの番人の役割を務めていたものと思われます。事実、昭和の末頃までは刀剣類などが保管されていた農家もあった、とのことでした。

お伊勢様

須川地区を一望できる高台に「お伊勢様」と呼ばれる木祠が祀られています。「お伊勢様（伊勢神宮）」は天上界を支配する天津神の総称です。一方この地区には、現在はありませんが過去には地上界を支配する国津神である「諏訪神社」もありました。さらには、愛媛県に本社がある「大山祇神」を祀る神社もあります。このように、多くの神々を祀る神社が須川のような小規模の集落で見られることはたいへん珍しいことではないかと思われます。

3 須川池（須川湖 『諏訪形誌』 184ページ）

須川池は、小牧山（標高749m）と、陣屋の峯（標高797m）の間の窪地に位置しています。承応3年（1654）から明暦3年（1657）の仙石氏が上田藩主を務めていた時代に、ため池として改修された、標高720m、周囲3km、最大水深4.6mの人造湖です。なお、私たちはふだん「須川湖」と呼ぶことが多いのですが、正式名称は「須川池」です。

1 農業用水としての役割

須川池は稲作のための水を供給するためにたいへん重要なものです。須川全域はもちろんのこと、明治40年（1907）ころまでは、須川と諏訪形の中間地点に「喜一郎屋敷」と呼ばれる場所があり、そこにあった四枚ほどの水田にも水を供給していました。また、昭和36年（1961）ころまでは、現在の悠生寮の南側にあった清水力の水田にも水を供給していました。さらに、そのすぐ下流から長池（現在、創造館がある場所）に水を供給していました。また、下流の炭坑山の下、北斜面一帯の山田にも農業用水を供給していました。さらに、旧六ヶ村堰ができるまでは、下流の金窓寺川を通じて、諏訪形の小牧山側にある水田にも水を供給していました。そのため、須川池の護岸工事、改修工事などの時には、水の供給を受けている各地区から人々が集まって工事を行っていました。

また近年、万一須川池の土手が決壊した場合、土石流災害が起きるのではないかとということが、城下地区全体の課題となっていました。このようなことから、諏訪形自治会では、東日本大震災を踏まえ、早期の安全対策を実施するよう、長野県や上田市に要望を行っていました。県では要望にこたえ、平成25年（2013）、須川池堤体の強度を確認するためにボーリング調査を行いました。その結果、震度5強以上の地震の際には堤防が損傷する恐れがあり、補強工事が必要であることがわかりました。平成28年（2016）、上田市内のため池17か所のうち、最初の「ため池耐震工事」が須川池で行われ、翌年3月に完成しました。工事費用は822万円で、城下地区の負担金は約13万円、諏訪形自治会の負担金は約18000円でした。

2 須川池の生息魚介類および淡水植物

昭和40年（1965）ころまで、須川池で確認できた生物は、魚介類では、鯉（こい）、鮒（ふな）、手長海老、烏貝、蜆（しじみ）などでした。また、淡水植物としては、菱（一年草の水草で白い花が咲き、夏の終わりから秋にかけて菱形の実をつけて茹でて食べると美味）、藻、よし、ウキヤガラなどが見られました。当時、鯉や鮒は釣りで、手長海老は「けいさん」や「うけ」を使って捕獲し、鯉は鯉こく、鮒は空揚げに、また、手長海老は天ぷらにして食べていました。

昭和42年（1967）ころから、水草の「菱」が湖面の半分以上を覆うようになってしまいました。数年の間は、鎌などで刈取っていましたが、手におえなくなったため、対策として外来種の「草魚」を放流しました。その後、昭和58年（1983）に確認できた魚介類は、草魚、鯉、鮒、手長海老、だぼで、二枚貝の烏貝や蜆は確認することができなくなりました。水草は草魚に食べ尽されたためか、生息していたのは「よし」のみでした。

水草が著しく減少したためか、魚類の餌となる、水棲昆虫の幼虫やプランクトンなどが激減したため、在来種の魚介類は年々、数を減らしていきました。そのような中でも、草魚だけは大きく生長し、体長一メートル位のもの、多数見られるようになりました。その後、平成の時代になると、在来種の魚は激減、草魚も水草を食べ尽してしまったためか、激減してしまいました。このような時期に、誰かが須川池に、外来の肉食魚であるブラックバスやブルーギルを放流したようです。釣りをする人にとって、これらの魚は引きが良く、楽しめるものなのですが、生態系に与える影響もたいへん大きなものとなってしまっています。

3 須川観光協会

スケートは、昭和10年（1935）ころから、子どもたちの冬の遊びとして盛んに行われるようになりました。当時は下駄スケートで、足に縛って固定する紐は真田紐（非常に丈夫な紐）、齒は鉄製でした。雪かきや竹箒を使って雪を取り除き、自分たちでスケートリンクを作って楽しんでいました。



昭和24年（1949）ころになると、当時は「車道」と呼ばれていた須川池までの道路が徐々に拡幅され、昭和26年（1951）ころには、普通自動車が行き来できるようになりました。また、昭和28年（1953）の「全日本スピードスケート選手権大会」開催も決まりました。この大会に向けてのアピールのために、当時フィギュアスケートの国内トップ選手だった稲田悦子の演技が須川池で披露されました。また、須川自治会の人たちは昭和26年（1951）と27



年（1952）の二年間、北海道の河村泰男の指導のもと、400mの競技用リンクの作り方、氷の作り方、リンク管理全般を学びました。昭和27年（1952）10月になると、宿泊施設「湖月荘（社長は当時の市議会議員手塚秀雄）」が竣工し、大会本部席の建物も完成しました。



昭和28年(1953)2月、「全日本スピードスケート選手権大会」が開催されました。選手などが宿泊する施設は湖月荘だけではまかないきれないため、須川の各家への民泊も行われました。この大会を機にスケートを楽しむ人口が増加して、上田丸子電鉄株式会社が上田駅から須川池までのバスの運行を始めました。当時はまだ、須川池から丸子町に通じる道路は、車は通ることができませんでした。

昭和29年(1954)、青木喜一郎が須川の自治会長の時、須川池から丸子町尾野山までを三つの区間に分け、須川の人たちがそれぞれを分担して車道を建設しました。当時は養蚕が盛んな時代だったため、作業は秋蚕終了から春蚕が始まるまでの間に、鍬、シャベル、畚(もっこ)畚と荷車などを使って行われました。またこの事業は、昭和27年(1952)から29年(1954)に大発生したイモチ病で打撃を受けた農家に対する県の救済事業ともなりました。上田から須川を通り丸子に抜けるこの道路は、昭和36年(1961)に、上田から須川までが県道となり、さらに昭和57年(1982)に、丸子までの全線が県道となって現在に至っています。



道路が旧丸子町まで開通すると、昭和29年(1954)11月5日から、上田丸子電鉄株式会社が上田駅—小牧—諏訪形—須川—尾野山—依田村役場—飯沼—長瀬駅の路線バスの営業を開始しました(上田丸子電鉄社報第四号)。

バスが利用できるようになったこともあり、須川池のスケート場は大いに賑わいました。特に、日曜日や祝日、学校が冬休みや寒中休みの期間中は、芋洗いの状態でした。また、大人たちから、混雑していない時に滑りたいという要望も多かったため、ナイターでのスケートも始まりました。また、いろいろなスケート大会や各学校の大会なども盛んに開かれるようになったこともあり、須川自治会が中心になって「須川観光協会」が設立されました。

須川観光協会は、12月中旬から三月末までのスケート、4月中旬から11月上旬の貸しボート、4月中旬から12月上旬の釣りを「三本柱」として営業していました。中でも、観光協会が最も力を入れたのが冬場のスケートで、冬の人気スポーツとして大いに盛り上がりました。しかしその後、温暖化の影響もあって須川池に氷が張る期間が短くなってしまいました。また、軽井沢などに設備の整ったスケート場ができたり、スキー人気が高まったりという中で、須川池でのスケート熱は衰えていきました。現在では、上田市内でスケートを楽しむことができるのは「市民の森スケート場」だけとなってしまっています。



貸しボートは、春から秋まで営業することができました。水草の菱が湖面にちらほら見られたころには、夏から秋の初めに実をつける菱の実を採集したり、周りの景色を眺めたりしながら、軽快にオールを漕いで楽しむことができました。しかし、菱が湖面の半分以上を覆うようになると、それがオールにからまって気持ちよくボートを漕ぐことができなくなり、徐々に衰退していきました。

鯉、鮒の在来種が多く生息していたころには、釣りは須川池観光で目玉のひとつでした。しかし、水質の変化や外来魚の導入などによって在来種が減少し、そのため釣り人も減少してしまいました。観光協会では湖前面の狭い場所を利用して網を落とし、つり堀として営業していましたが、採算がとれなくなってしまい、昭和40年代の初めに「須川観光協会」は解散しました。

須川公民館に安置されている仏像（『諏訪形誌』 283ページ）

須川公民館には次の2体の仏像が安置されています。どちらも「三夜堂」から移されたものです。

1 地藏菩薩座像（『諏訪形誌』 283ページ）

地藏菩薩は、お釈迦様が亡くなり、世の中に仏がいなくなってしまう世界で、56億7千万年後に弥勒菩薩がこの世に出現するまでの間、人々の悩みを救うという崇高な仏です。三夜堂に収められていた地藏菩薩坐像は、木造、彩色、彫眼で、総高42.8cmで、室町時代の作と考えられています。この像は厳しい顔立ちで、座禅を組んだかたちで座っています。がっちりとした体躯には太く力強い衣文が刻まれ、耳も大きくて豪快です。左手首と錫杖は残念ながら失われています。また、首部は挿首方式となっています。江戸時代の仏像に見られるような、形式化されたきれいな作風とは異なり、いくぶん粗放な力強さを特徴とする像で、鎌倉時代の写実的な表現が時代を経る中で様式化された、室町時代に作られた像であると思われる。像底には墨書がありますが、摩損していて、判読できません。



2 勢至菩薩立像（『諏訪形誌』 283ページ）

勢至菩薩は阿弥陀三尊の脇侍で、智慧の光で一切を照らし、人々の迷いを取り除いて、無上の力を与えてくれる仏として信仰されています。三夜堂に収められていた勢至菩薩立像は木造、玉眼で漆箔、光背と台座を伴って、厨子の中に納められています。総高は40.6センチメートルで、江戸時代、19世紀の作と考えられます。

陰暦の二十三日の夜、月待をすれば願いが叶うという信仰があり、この堂内でもそのような行事が行われていたものと思われる。ただ、須川地域の人たちでこのような行事について知る人はいないようです。



6 大山祇神社（『諏訪形誌』 275ページ）

須川池南側にある小高い丘の上、松林の中に、高さ90cm、間口45cmほどの石祠「大山祇（おおやますみ）神社」が祀られています。「大山祇神」は伊邪那岐命（いざなぎのみこと）と伊邪那美命（いざなみのみこと）との間に生まれたとされる神です。記紀神話では「山の神」とされ、地上世界神の代表的な存在です。大山祇神社の本社は、愛媛県今治市大三島にある「式内社伊予国一の宮（旧国幣大社）」で、海の神、酒の神、田の神として、また、軍神、武神としても古くから信仰を集めてきました。どのような理由で大山祇神社が須川に勧請されたのかについて、はっきりとしたことは伝わってはいませんが、須川地区が森林資源の宝庫であることから、山を支配する最高の神である大山祇神を祀ったのではないかと考えることもできます。また、7年に一度行われる「生島足島神社」の御柱祭で使われる「御柱」は、須川地区から提供されていました。



大山祇神社の祭りは毎年、八十八夜に行われています。隣村の尾野山など近郷からの参詣者も多く、消防団員が警備に当たっていたような時期もありました。また、現在は、諏訪神社の神社委員会が須川自治会とともに運営にあたっています。

4 山の神（『諏訪形誌』 274ページ）

「山の神」は山仕事に従事する人たちに信仰されたもので、男神、女神または夫婦神とされ、天狗の別称とする地方もあります。大山祇神、木花開耶姫として神社の祭神となることもあります。一般的には、小さな石祠や石、Y字形や三股など独特な形の木々を対象として祀ることも多く見られます。

諏訪形地籍の小牧山には、山の神と呼ばれる石(せき)石祠(し)祠が二か所に祀られています。一つは、県道上田塩川線扇平(舟窪)入口の「上の山



の神」、もう一つは上田悠生寮から100mほど須川寄りの左側、大きな岩の近くの「下の山の神」です。この二つの「山の神」は、山仕事をする人たちの守護神で、戦前から戦後の一時期までは、毎年の1月17日が祭日とされ、たくさんの方が参拝していました。参拝する時には、長さ70～80cmの萩の木で弓を作り、篠竹で矢を作って、白い紙におひねりにした米を弓に縛りつけたものを合わせて奉納しました。また、同じものを家の露地などにある樹木に吊る人もいました。弓を奉納する理由はよく分かりませんが、一年中の燃料を森林資源に頼っていた当時の人たちの、山の神に対する敬(けい)敬虔(けん)虔な気持ちがわかるような気がします。また、この日は山仕事をしてはいけない「禁忌日」ともなっていました。現在ではこのような風習は見られなくなってしまいました。



6 小牧山の凝灰角礫岩の岩柱 (『諏訪形誌』 22ページ)

小川層の堆積が続いていた今から800万年ほど前から、上田地域で火山活動が始まります。この火山活動は大きく分けて4回繰り返されたと考えられています。

1回目の活動は悠生寮近くの県道上田塩川線(須川線)道路沿いや原峠保養園の西側の林道原峠線沿いなどで確認できます。2回目のものは悠生寮南側の県道上田塩川線沿いや小牧橋付近の千曲川河床などで見ることができます。さらに、3回目の活動では岩下地区の「太鼓岩」などができ、4回目の活動では瀬沢川が千曲川に合流するあたりや須川湖の北側などで確認できます。

特に、岩下の「太鼓岩」や「太鼓淵」、悠生寮南側の巨大な岩柱(火山角礫岩や凝灰角礫岩という、火山灰が固まった岩石でできています)などは火山活動のあとをはっきりと残すものとなっています。



「800万年前」「凝灰角礫岩」とは…

あまりにも大きな数字は実感を持ってとらえることが難しいですね。ここに出てくる「800万年前」というと「新生代第3紀」と呼ばれる時代ですが、それにしてもかなり意味不明です。ただ、私たちの直接の祖先にあたる生き物(「新人」と呼ばれ、「クロマニヨン人」などが代表的です)が地上に現れたのは今から約4万年前とされていますから、「800万年前」というのはそれよりもずっと前ということです。ヒトの先祖にあたる生き物が現在のチンパンジーなどと分かれて進化が始まったのが今から700万年くらい前と考えられているので、ちょうどそんなころ、ということでしょうか。と言われてもよくわかりませんが…。

また、この岩柱をかたちづけている「凝灰角礫岩、火山角礫岩」は火山からの噴出物(火山灰や岩片など)からできている岩石です。火山灰が主な成分で、そこに比較的大きな粒の岩が含まれているのが特徴となっています。

1 タタラ塚古墳 (『諏訪形誌』 32ページ)

「タタラ塚古墳」は、県道上田・塩川線沿いにある上田悠生寮施設の南側の緩傾斜地に南西方向に羨道口をもった横穴式円墳で6～7世紀ころに作られたものといわれています。羨道口部分は土砂の崩落により崩れていて、羨道部分の天井石が一枚あるのみで、玄室(遺体を納める室)部分の天井石は試掘の際持ち去られたのか現存しませんが、玄室内部は見る事が出来ず。出土品については一切わかりません。



この古墳は、昭和63年(1988)、上田市指定記念物(史跡)に指定されています。なお、「タタラ」とは鍛冶工場の送風装置の「フイゴ」の風の出口のことであり、このことに関係した古墳であったかどうかについてはわかりません。

ウォーキング豆知識

1 「須川」という地名の初見（『諏訪形誌』 206ページ）

慶長6年（1601）、眞田信之が、重臣である大熊五郎左衛門に「小牧69貫文と須川9貫文余りの知行地を与えた」という文書があるため、「須川」という地名そのものは、それ以前からあったことは確かです。

この文書が「須川」と言う地名の文書初見と思われます。

2 須川の人たちは現在の「田端」地区に住んでいた（『諏訪形誌』 48ページ、206ページ）

当時、須川の人たちが居住していた場所は、現在地よりも尾野山寄り、田端か花水地籍にあっただと考えられ、古戦場までは約550mの位置です。田端地籍には、「古屋敷」という地名が残っており、かつては周囲が見通せる高台で、昭和時代後半には須恵器（すえき）も畑地から出土しています。

昔、須川の人たちが住んでいたのは現在とは違って「田端」という地籍でした。「田端」地籍は現在の集落よりも県道塩川線の尾根山地籍寄りの場所で、現在では山林になっています。この「田端」地籍には「古屋敷」という古名があり、この場所からは青磁器や陶器の破片が出土しています。これらの出土品はいつ頃のものはっきりはしませんが、中世末期（戦国時代）まで遡ることができるものと考えられ、このようなことから、「田端・古屋敷」が須川の人たちの居住地だったものと考えられています。

3 観応の擾乱（かんのうのじょうらん）と須川（『諏訪形誌』 48ページ）

室町時代初めころの貞和5年（1349）、足利尊氏とその弟の直義との間で対立が起きました。この「観応の擾乱」と呼ばれる戦乱は、多くの人々や朝廷までも巻き込んで全国に広がり、観応3年（1352）まで続きました。あまり知られてはいませんが、「観応の擾乱」の古戦場が諏訪形の近くにもあります。

尊氏方の佐藤蔵人元清という人が書いた、自分の軍功を主君に上申するための「軍忠状（書状）」には、「信濃国小県郡夜山（よのやま）中尾で観応3年（1352）12月10日（旧暦）に最大の合戦があった」とあります。小県郡には「夜山」という地名は見当たらないのですが、須川地籍のすぐ隣、丸子の「尾野山（おのやま）中尾」のことではないかと考えられています。この「中尾」地籍は尾野山集落の北西一帯にあります。

… 中 略 …

足かけ4年にわたった「観応の擾乱」は、直義の死去によって一応、尊氏側の勝利に終わりました。しかし、その後も対立はくすぶり続け、尊氏の孫義満が3代将軍につくころようやく終息しました。こうして室町幕府は安定期を迎えることになりました。

参考文献『上田市誌 歴史編 眞田氏と上田城』

この「観応の擾乱」戦いは、信濃の豪族たちが双方に分かれて戦った合戦でした。この戦いの古戦場であったと思われる「中尾地区」は、当時須川の人たちが住んでいた地区から直線距離で500～600mほどしか離れていません。須川の人たちはたいへん不安な気持ちでいたのではないかとということが想像できます。

4 菩薩の名前のある道しるべ

「道しるべ」は江戸時代、旅人の安全や行き先案内として数多く建立されました。『上田・小県の道しるべ（上田創造館編纂）』によると、上田・小県地区には150あまりの「道しるべ」があるとのこと。この「道しるべ」の多くは、当然のことながら、（前回のウォーキングイベントでも見学した「荒神宮への道しるべ（『諏訪形誌』273ページ参照）」のように）行き先の地名のみが彫られています。中には、数は少ないのですが、地名以外に菩薩名の文字なども彫られているものがあります。

須川から鴻ノ巣方面に向かう道沿いに「長久保道・別所道」の行き先に加えて「地藏菩薩」の文字が掘られている珍しい道しるべ（高さ43cm、幅25cm）があります。建立年は不明です。「長久保道」とあるのは、「助郷（『諏訪形誌』59ページ参照）」に駆り出された農民たちのための道しるべではなかったかと想像されます。

諏訪形誌を歩く

須川地区散策

※()内の数字は諏訪形誌の掲載ページです

庚申塔 (p.279)

この付近は「宮浦」と呼ばれていて、以前、諏訪大明神があったと思われる場所です (p.271)

諏訪形へ

横林家住宅には「出桁造り」が見られます

三夜堂内に安置されていた勢至菩薩像と地藏菩薩像は現在は須川公民館内に安置されています (p.283)

歩けば…

- 駐車場
- ↓ 270m
- 須川公民館
- ↓ 450m
- 庚申塔
- ↓ 600m
- 伊勢神社
- ↓ 250m
- 三夜堂跡・筆塚
- ↓ 500m
- 大山祇神社
- ↓ 200m
- 駐車場

横林家住宅

伊勢神社

このあたりに「番所」があった

道祖神

三夜堂 (p.283)

女学生開拓地跡 (p.104)

公民館

小牧山登山口→

筆塚 (p.281)

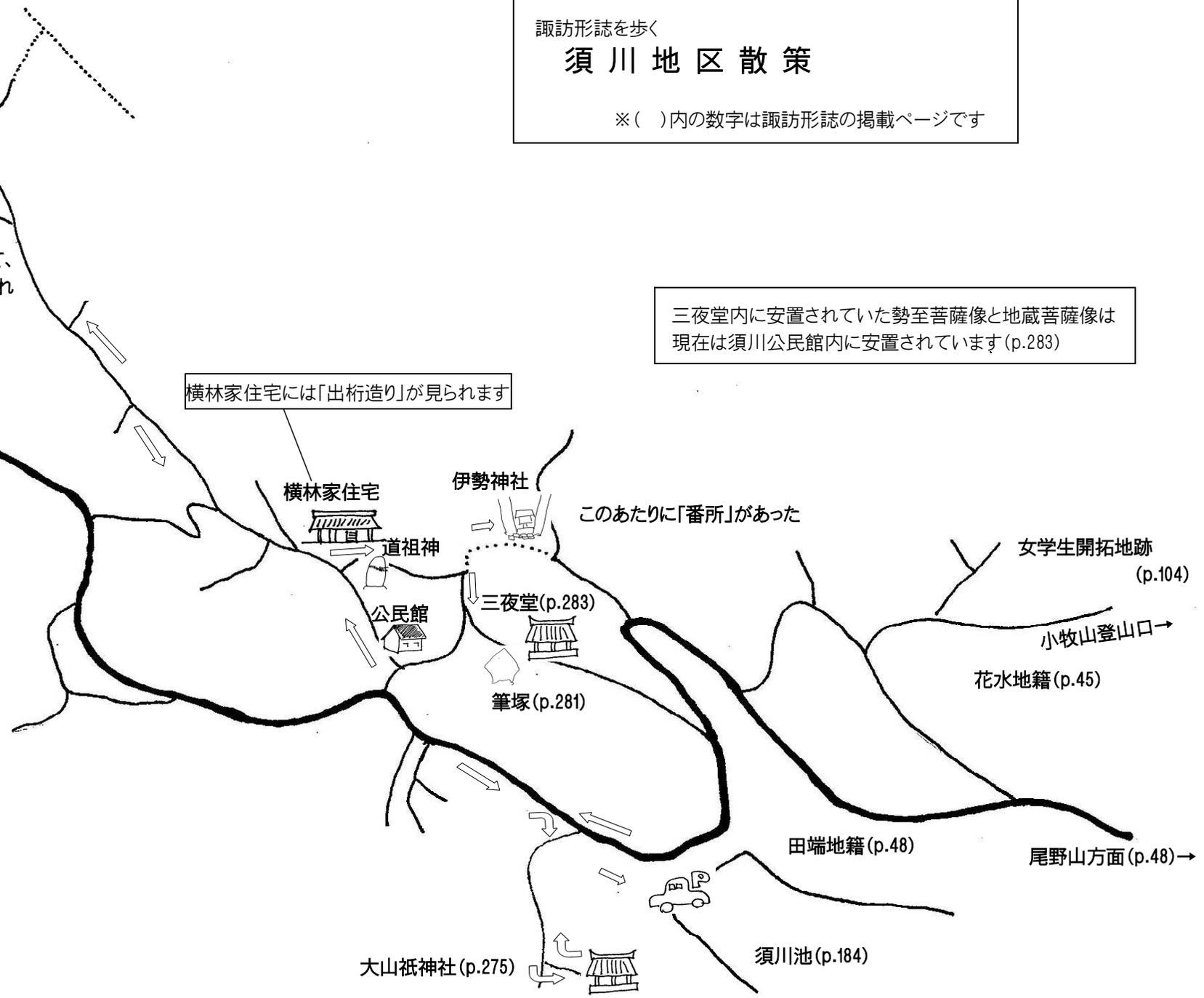
花水地籍 (p.45)

田端地籍 (p.48)

尾野山方面 (p.48)→

大山祇神社 (p.275)

須川池 (p.184)



諏訪形誌を歩く

須川への旧道

※図中の数字は諏訪形誌掲載ページです。

※ここで紹介しているコースはよく整備されていますが、
ほぼ全体が山道です。準備をしっかりとって入ってください。



グループホーム諏訪方形(p.185)



林石材商会

上田市霊園
(p.196)

山牧山

上田里山保存会の案内板

国山散歩

旧道入り口

須川に向かって道路左側に階段がある場所を、階段には行かず、そのすぐ下を左(東)側の山道に入る。

蚕影社(p.276)

悠生寮下(北)側、歩道が切れるあたりで東側の林に入り、約200mで蚕影社です。

悠生寮(p.18)



夕塚古墳(p.2)

案内板のある分岐



凝灰角礫岩の岩柱(p.22)

歩けば…

- 霊園東屋
- ↓ 100m
- 里山保存会案内板
- ↓ 650m
- 案内板のある分岐
- ↓ 500m
- 休憩場所
- ↓ 250m
- 鉄塔・小牧への分岐
- ↓ 120m
- 庚申塔への分岐
- ↓ 120m
- 墓地への分岐
- ↓ 150m
- 水道施設があるピーク

休憩場所
(見晴らし良好!!)

歩けば…

- 霊園東屋
- ↓ 450m
- 旧道入り口
- ↓ 230m
- 蚕影社
- ↓ 530m
- 案内板のある分岐
- ↓ 500m
- 休憩場所
- ↓ 370m
- 庚申塔への分岐
- ↓ 70m
- 須川庚申塔

須川の庚申塔(p.279)



小牧

「月見堂跡・小牧」の案内板

「月見堂跡」経由で小牧公民館付近まで約30分。途中、道ははっきりしない部分があるので要注意!

須川集落・須川池方面へ

(墓地)

△ 水道施設があるピーク
標高738m

小牧山・小牧城跡へ